
色褪せた教室

syou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色褪せた教室

【Nコード】

N5134U

【作者名】

syou

【あらすじ】

休日、友人の大崎に呼ばれた『俺』は電車に乗って目的地へ向う。非日常的な教室が開かれる。

果汁百パーセントの葡萄ぶどうジュースが無かったので、俺は自動販売機から離れてホームのベンチに座った。ゾーンズ越しにプラスチックの冷たさが伝わってくる。ぞわっと背筋が粟立つ。

まあ、それも少しすれば慣れる。自分にそう言い聞かせ、冷たさから目を背ける。

俺は自分の腕時計で時間を確認し、その後電光掲示板を見る。電光掲示板の表示が間違っていないければ、堵とじ燐りん行きの快速はどうやらもうすぐ来るようだ。

はあ、と俺は溜息をつく。何故休日にもかかわらず部屋を出なければいけないのだ、と俺は今更そんな事を思う。

『服を買うのを手伝ってくれないか』と大崎から昨日の夜にいきなりメールが来た。『俺はセンスが無い』と返信したが『とにかく来てくれ』と言われ、渋々ここに来た。本当は無視して行かないという方法もあったが、中学時代に色々迷惑をかけたことを思いだし、行く事にした。

「まもなく、二番線に六両編成の堵とじ燐りん行き快速電車が参ります。黄色い線の内側までお下がり下さい」どこの駅でも聞く声が、電車の到着を報せる。きつと彼女は、今ここでアナウンスをし終わったら、また他の駅へ行く事なんだろう。多忙だな、と同情する。

線路を駆ける音が聞こえ、俺はベンチから立った。折角冷たさにも少し慣れたのに、と温もりが残ったベンチを名残惜しく見る。

ごうつと風を切って、快速電車が駅にやってくる。速度が徐々に緩くなっていき、止まる。ドアが一斉に開き、乗客が数人降りてくる。こんな田舎に何の用があるのだろうか、と訝しげに降りた人たちを見る。

「布農里ふのうら、布農里」さっきとは違う駅員のアナウンスが聞こえる。きつと彼女はもう、他の駅へと旅立ったんだろう。

俺は、席がまばらに空いているその列車へと乗り込む。中に入ると寒気が俺を出迎えた。寒いと感じるが、次第に車内の暖かい空気と中和していき、程よい暖かさになった。

左端の優先席が空いているのが目に入る。俺はこちらから見て左の奥の席に座る。足元の空調器具から暖かい風が吹いている。その風を受けて、俺はほっと一息をつく。脚の筋肉の周りについていた氷が、解けていくような感覚。これは何と言うか、物凄く凝っている肩をマッサージされている時と似ている。俺は、気を抜いたらすぐにでもその暖かさに顔が微笑んでしまう表情筋を、引き締めながらそう思った。

目の前の席には、ちょうど老人がいた。手には大事そうにランプを持っている。中には何が入っているのだろうか。ランプの魔人かはたまたカレーのルーか。

ゴトン、と音が鳴って電車が軽く揺れた。全く意図していない出来事だったので、俺は席から落ちてしまう。周りを見ると、乗客の皆さんがこちらを見ていた。恥ずかしさの余り、顔が熱くなる。

俺はそそくさと席に戻ろうとするが、目の前にあのランプが転がっているのが見えた。恐らく、さっきの揺れで老人が落としてしまったんだろつ。

俺はそのランプを手を取った。奪おうとか、そういう目的ではない。勿論、持ち主に返す為だ。

「ああ！」目の前の老人が、顔に似合わないソプラノボイスでそう叫んだ。俺はその声に驚いて、ランプから手を引っ込めてしまう。もしや、本当にカレーが中に入っていたのか。

眼前が歪み、まどろみに浸る感覚。

ぼんっ、という安っぽい小さな爆発音と共に、ランプの先から煙が出てきた。

ランプから出てきた紫色の煙は徐々に形になっていき、はっきりと目視できるようになった。

人型。ふくよかな体型で、体の色は煙と同じ紫色。茄子のような

顔の形をしている。人間と唯一違うと思われるのは、脚が無く、ランプから上半身が出ている事だ。もしかすると、俺の目からは見えないが内臓や血液が無いかもしれない。そうすると、唯一ではなくなる。

じつくりと、そのランプの魔人らしき煙の固まった固体を見てみると、眉を顰めて魔人は喋りだした。

「何か用か？」

俺は自分の耳を疑った。普通、こういう時は願いを三つ叶えてやる、とか言うんじゃないのか？ それなのに「何か用か」って、こいつは無愛想な自営業のおっさんかよ。俺は、不審者を見る目で、その顔面茄子を見た。

「何だ？ 願いでも叶えて欲しいのか？」そう言って、茄子は鼻で笑った。俺はその笑い方に苛立つ。

俺は舌打ちをして答える。「別にそんなことは思っていないよ。けど、普通そこはそう言うんじゃないのか、と思ったただけだ」

はあ、と茄子は溜息をつく。「わかってねえなあ。何のメリットも無く人がホイホイと願いを叶えるかつつうの。メリットが無きや叶えねえよ」

随分と現実的なランプの魔人だな、と心の中で苦笑する。

「よく考えてみるよ。見も知らぬ人間にお前は金をあげるのか？ やらねえだろうが、普通は」

「けど、大金持ちの人とかおばあちゃんとかが、貧しい人とか迷子の子供にあげてたりするじゃないか」言ってから、そんな話フィクションの中だけだろうけどと思った。

茄子は顎に手を当ててやけに真剣に話し始めた。「前者は見栄を張るためだ。人間って言うのは、いつでも人に良く見られようと努力するもんなんだよ。ほら、大人の女がそうだ。毎朝、髪の毛のセットやらメイクやらとやっているだろ？ それと同じだよ」

魔人の視線が、俺に突き刺さる。痛い。特に暴力を振るわれていないのに。痛い。

「後者は、死期が迫っているのを心の奥底で感じ取っているからだ。生前、悪いことをしたやつは地獄に送られるって言うだろ。だから、少しでも生前にやった悪行を軽くする為に、人は老けると人に優しくなる」

魔人の視線が、さっきのおじいさんに向けられる。彼もまた、そうなのだろうか。

そこで、ふと気がついた。周りの色が褪あせている。そして、誰も
が止まったままだ。電車の走っている音も聞こえない。外の景色も
止まったままだ。

魔人はにやりと笑っている。「どうしてこうなってるか知りたい
んだろ」

「……ああ」奴の思い通りなのは、何か腑に落ちないが、俺はそう
答えた。

ふん、と鼻で笑って答えた。「何のメリットも無いのに教えるか
よ」

にやりと笑う。そして、声を出さずにじゃあなと言った。

目の前が歪んでいき、電車の揺れる音で瞬きをした。

移り変わる窓の景色、聞こえる音、動いている乗客。元に戻って
いた、綺麗さっぱり。

ランプは、まだ電車の床に落ちていた。煙は出ていない。おじい
さんが、慌ててそれを拾った。

何が起こっていたんだろうか。今、あのランプに問いかければ、
またあの魔人が出て来そうな気もしたがやめておいた。どうせ、教
えてくれない。

「玲れいでん淀、玲淀」目的の駅の名前がアナウンスで言われる。俺は床か
ら立ち上がり『こちらのドアが開きます』と光っているドアに向か
う。

緩やかに失速して行き、電車は止まった。ドアが開き、冷たい風
が俺の体にぶつかる。思わず首を竦める。

電車を降りると、大崎が待っていた。笑顔で手を振っている。

ふと、さっきの魔人の話を思い出す。メリットがどうこつの話だ。それを思い出して、苦笑する。そして納得する。ああ、だから俺はこんなにもやる気が無いのか。

よお、と俺は手を振る。心の中で、この際いつそ白のタキシードでいいんじゃないか、と俺は脳内であいつの顔に、タキシードを合わせてみる。

(後書き)

堵憐、布農里、玲淀という駅名は架空のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134u/>

色褪せた教室

2011年7月2日03時11分発行